

ハートフルなんぶ

2026. 2月号 vol. 323

長野市立南部図書館
〒388-8006
長野市篠ノ井御幣川 1201 番地
TEL (026) 292-0143
FAX (026) 292-0559
<https://library.nagano-ngn.ed.jp/>

第174回 直木賞・芥川賞 決定！！

直木賞

『カフェーの帰り道』嶋津 輝／著

芥川賞

『時の家』鳥山 まこと／著
『叫び』畠山 丑雄／著



Essay

「たゆたいながら沈まずに」

はじめて本物のゴッホ《ひまわり》を見たのは、十九歳のときだった。新宿にある美術館。けれど、そのひまわりは「初対面」ではなかった。実家で母が気に入ってキッチンに飾っていたからだ。保険会社でもらった布製のタペストリー。ペラペラのそれは、わたしの生活の背景としてそこにあった。何度も目にしてきた、なじみのある絵。だから私は、その絵があると知ったとき、少し油断していたのだと思う。知っている絵だ、と。

今思えば当たり前なのだが、実物は想像を超えていた。とても生々しい絵だった。だけど美しいとも思えず、やけに重い黄色の絵の具が、いまも記憶にこびりついている。

その後、ずいぶん時間がたってから、原田マハさんの『たゆたえども沈まず』を読んだ。そこで知ったのは、恐らくゴッホは決して達観した画家ではなかった、ということだ。

小説の中のゴッホは、ひどく乾いているようだった。

牧師の息子として生まれ、やがて自らも牧師を志した。人を救いたかったし、神に選ばれた生を生きたかった。けれど牧師としても受け入れられず、次に画家として生きようとしても、理解されなかつた。愛されたい、受け入れられたい、ここにいていいと言われたい。そんなふうに、私は感じた。

小説を読んでから、どうしてもゴッホが描いた糸杉の絵を見たくなった。糸杉は、ヨーロッパではごくありふれた、細く高く伸びる木だ。墓地や修道院のそばに立ち、空へ向かってまっすぐ伸びるその姿は、オベリスクや、善光寺のご開帳で立てられる御柱のようにも見える。病院の窓から、ゴッホもまたその糸杉を見ていた。有名な《星月夜》にも描かれている。

糸杉を見に行つたのは、コロナ禍。世の中全体が息を詰めているようで、私自身も、理由のはっきりしない息苦しさを抱えていた。ゴッホ展の情報を得たわたしは、思い切って休みをとり、一人で電車で名古屋の美術館へ行つた。

わたしは展示室で糸杉を前に、なんだか、いま世の中がわけがわからないけれど、わからない今まで、いいや、と思った。

宮沢賢治の「雨にもまけず」も、完成形の詩ではない。「そういう人に、わたしはなりたい」と、なれない自分を含んだまま書かれている。早く答えを出そうすると、苦しくなる。

ゴッホはそれに耐えきれなかつたのかもしれない。三十七歳の若さでこの世を去つた。それでも彼は描いた。たゆたいながら、沈まずに。

寄稿: 夕焼けざくろ

『グロリアソサエテ』朝井 まかて／著 KADOKAWA 『Fア』

『武家女人記』砂原 浩太朗／著 集英社 『Fス』

『ここにいるよ』真山 仁／著 祥伝社 『Fマ』

『60代、日々好日 時々ため息』唯川 恵／著 光文社 『914.6ユ』

『最後に先生からのお話です』鶴野 莉紗／著 KADOKAWA 『Fヌ』

『晴れの日の木馬たち』原田 マハ／著 新潮社 『Fハ』

『ルーカスのいうとおり』阿津川 辰海／著 幻冬舎 『Fア』

『猿』京極 夏彦／著 KADOKAWA 『Fキ』

『お稻荷さまの謎解き帖』朝水 想／著 双葉社 『Fア』

『歓楽の家』イーディス・ウォートン／著 彩流社 『933ホ』

『人とかかわるのがずっとつらかったあなたへ』帆足 晓子／著 草思社 『146ホ』

『世界の虫を食べてみたい』吉田 誠／著 緑書房 『383ヨ』

『偉大なるチキン野郎』リュウジ／著 扶桑社 『596リ』

『写真のこたえ』小林 紀晴／著 インプレス 『740コ』

『22文字で、ふつうの「ちくわ」をトレンドにしてください』武政 秀明／著 サンマーク出版 『816タ』

『観る技術、読む技術、書く技術。』北村 匡平／著 クロスメディア・パブリッシング 『002キ』

『50のストーリーでつながりがわかるイスラムの世界史』宮田 律／著 中央公論新社 『227ミ』

『痛みとは何か』ロブ・ボディス／著 大修館書店 『491ホ』

『帰宅後15分しか、かけません!無敵の仕事帰りごはん100』みき／著 KADOKAWA 『596ミ』

『スパムの歴史』ケリー・A.スプリング／著 原書房 『648ス』



2月の新刊案内



『皇室とメディア』河西 秀哉／著 新潮社 『288カ』

『図説メディチ家の興亡』松本 典昭／著 河出書房新社 『288マ』

『廷臣たちの英国王室』ヴァレンタイン・ロウ／著 作品社 『288ロ』

『世界の伝統ニット』日本ヴォーグ社 『594セ』

『イタリア食紀行』大石 尚子／著 中央公論新社 『612オ』

『食で読むヨーロッパ史2500年』遠藤 雅司／著 山川出版社 『383工』

『「音楽の都」ウィーンの誕生』ジエラルド・グローマー／著 岩波書店 『762ク』



『ハプスブルク家の歴史を知るための60章』川成 洋／編著 明石書店 『288カ』

『イラストで読むヨーロッパの王家の物語と絵画』杉全 美帆子／著 河出書房新社 『288ス』

『ノブレス・オブリージュ イギリスの上流階級』新井 潤美／著 白水社 『361.8ア』

『<図説>食材と調理からたどる中世ヨーロッパの食生活』ハンネレ・クレメッティラー／著 原書房

2月のテーマ 「ヨーロッパ」

『383ク』

『フランスの自然をいろいろクロスステッチ』ヴェロニク・アンジャンジェ／著 グラフィック社

『594ア』



開館時間：午前10時～午後6時

■は休館日です

2026年2月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28

2026年3月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				